

「希望」のメッセージ

春が来て、夏が来て、秋が来て…、
そして冬が来た。

コロナ禍での厳しい一年が巡った。

我がいせフィルムは、コロナ禍で上映が
ストップしてしまった三月以降、それでも
自分たちが企画する上映会だけは淡々と続
けて来た。「観たい」という人が一人でも
二人でもいる限りは、上映の場をつくって
行こうと思って。二桁の集客に届かないこ
との繰り返しで、やればやるほど赤字が増
えるような上映活動だったが、ぐっとこら
えて続けて来た。

「こんな状況の時に上映なんて…」と思
う方々もいると思うけど、甘んじて批判を
受けるしかない。映画なんて「不要不急」
じゃないか、と言う人もいるかもしれない
が、逆風の中で上映活動を続けて来て、我
がナリワイは「不要不急」などではない、
と確信を持つようになった。

私が、“映画を創り、観せることをしない
わけにはいかない”という強い思いを持つ
と同様に、“映画を観ないわけにはいかな
い”人々が、確かに居るのだ…芝居や音楽も
そうに違いない。

「映画を創り、観る」営みは、息を吸っ
て吐く、生きることの営みと、ほとんど変
わらないのだ。

今年上映した主な作品は『えんとこの
歌』だ。二月に毎日映画コンクール・ド
キュメンタリー賞を受賞し、十一月には文
化庁映画賞を受賞した傑作だ。

脳性マヒの障がいがあり、三十年以上寝
たきりで若者たちの介護を受けている、私
の学生時代の友人・遠藤滋の“いのちを生か
し合う日々”を追った二十数年間の記録…。

コロナ禍での『えんとこの歌』の上映は、
まさしくこの状況下でこそ観られるべき
映画体験だと思った。まるで、この状況を
予見して創られたかのような作品である。

障がいを持ち、痛みを抱え、自由を奪わ
れながら、人は人とどう関わって生きるの
かを、問いかけている映画。誰もが意味、
痛みを抱えている今、「ありのままの
いのちを生かし合う」という在り方を一貫
して生きて来た「えんとこ」を描いたド
キュメンタリーは、とても大切なメッセ
ージを送り続けていると思う。

「だって、君は一人で勝手に何かをやっ
ていくことなんて、出来ないだろう？」と。

世の中に蔓延している不安のメッセ
ージのただ中で、映画『えんとこの歌』は堂々
と「希望」をメッセージする。

遠藤滋は痛みをこらえながら「希望」を
語りかける。そして自分の足で歩きたいと
いう強い思いをあきらめず、介助の若者た
ちの力を借りて、歩いてみせるのだ。

「粘って、粘って、粘るだけしか武器は
無いんだ…」

今、私たちが受け止めるべきは、遠藤の
ような愚直でマツウな「希望」なのでは
ないかと思う。

映画『えんとこの歌』をぜひ観てほしい。
『えんとこの歌』の遠藤滋と介助の若者た
ちの一挙手一投足を見つめてほしい。

言葉の一つひとつに、耳を澄ませてほし
い…。そこには確かに「希望」のようなも
のがある。

「いのちは生きる方へ向かうのだから…」

伊勢 真一